

論 文

高等学校の体育実技球技種目の実施状況とその成果に関する調査研究

The State of Implementation and it's Assessment of Ball Game Classes in High School Physical Education

羽田 聡, 鈴木 明, 進藤 周治, 松永 直人

Satoshi HANEDA, Akira SUZUKI, Syuji SHINDO, Naoto MATUNAGA

Key words : 高等学校, 体育実技, 球技種目, 授業内容

high school, physical education, ball game, method of lesson

I. はじめに

2008年に改訂された新学習指導要領では, 体育の内容が「運動」と「知識」に区分され, 運動の基本的な分類が, 「体づくり運動」, 「スポーツ」, 「ダンス」に分類された。「スポーツ」は, 運動することを楽しんだり, 運動技能を基盤に, スキルや記録を高めたり, 対戦相手や対戦チームと競争したりするものである¹⁾。さらに「スポーツ」は「球技」をはじめとして, 「器械運動」, 「陸上競技」, 「水泳」, 「武道」の各運動領域に分類されている。

球技の特性は「個人やチームの能力に応じた作戦を立て, 集団対集団, 個人対個人で勝敗を競うことに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である²⁾」が, 高校生にとっても人一倍楽しめる種目である³⁾。

しかしながら, 学校によって球技を行う時間数や行う種目は必ずしも一致していない。学校の施設・設備, 取り巻く環境によって大きく異なるものである。また球技種目を担当する教員は必ずしも, その種目が専門であるとは限らない。

本研究は, 学生が高校時代に受けた体育実技種目の中から, 球技種目に着目して, 実際に行われた球技の授業が, 学生たちにどのように影響しているかを明らかにし, 今後の大学におけるよりよい球技指導の在り方を構築するためにを行った。

II. 調査方法

調査は本校スポーツ科学科に在籍する1・2年生を

対象に, 2017年5月に, 質問紙法による調査を授業時に行った。なお調査実施時には, 本調査の趣旨を説明し, 同意を得た者のみ, 質問用紙を回収した。回収率は100% (145名) であった。

調査内容は球技の授業に対する状況や印象をそれぞれの種目ごとに, 3年間ののべ授業回数, 授業の内容, ルールの理解や基本技術の達成, 指導方法, 授業の満足度, スキルアップの有無, 将来授業で教える自信などである。また調査結果の分析にはT検定, χ^2 (カイ二乗) 検定, 一元配置分析などを用い, 有意水準を5%未満とした。

III. 調査結果

1) 球技の種類

表1は高校時代に受けた球技の種類である。

5種類の種目を行ったものが多く24.3%, 次いで6種目22.9%であった。男女別にみると, 男子は平均して4.91 (SD1.56) 種目, 女子は5.72 (SD1.57) 種目で, 男

種目数	全体	男子	女子
3未満	11.1	16.3	7.8
4	17.4	20.1	15.6
5	24.3	32.7	20.0
6	22.9	18.4	25.6
7	10.4	5.3	13.3
8	13.9	7.2	17.8
n	145	55	90
p			*

*=p<0.05, **=p<0.01, ***=p<0.001

子よりも女子の方が行っている種目数が多く見られ、男女間に有意な差が認められた。

2) 種目別にみた実施率

表2は種目別の実施率を示したものである。

これの種目の中で実施率が高かったのは、バレーボール、バスケットボールであった。サッカーやソフトボール、バドミントンも多かったが、女子もサッカーの授業が66.7%と多かった。また表以外の種目では、ラグビー、ユニホック、ドッチボール、アルティメットなどを行っていた。

	n	実施率		
		全体	男子	女子
バレーボール	132	91.0	85.5	94.4
ソフトボール	99	68.3	69.1	67.8
サッカー	105	72.4	81.8	66.7
ハンドボール	43	29.7	25.5	32.2
バドミントン	101	70.0	52.7	80.0
バスケットボール	124	85.5	81.8	87.8
テニス(公式)	67	46.2	23.6	60.0
卓球	99	68.3	52.7	78.9

3) 3年間の種目別の授業回数

表3は高校3年間で受けた種目別授業ごとの総回数である。比較的受けた時間(回数)が多いのはバレーボール、バドミントン、バスケットボールなどであった。これに対してハンドボールは総実施回数が5時間(回)未満の者が40%と少なかった。男女別にみると、有意な差はサッカーとバドミントンで見られた(p<0.05)。サッカーは総時間(回)数が男子に多く女子は少なかった。またバドミントンにおいては、男子は6~10回が多かったが、女子は5回以下と10回以上の2極化の傾向にあった。

時間数	回数			男女比較
	5以下	6~10	10以上	
バレーボール	14.1	61.7	24.2	ns
ソフトボール	22.4	61.2	16.3	ns
サッカー	16.0	66.1	17.9	*
ハンドボール	40.0	55.0	5.0	ns
バドミントン	17.5	61.9	26.1	*
バスケットボール	16.7	59.2	23.3	ns
テニス(公式)	29.2	58.5	12.3	ns
卓球	30.2	51.0	17.7	ns

4) 各種目の授業内容

①授業の指導法の実際

各種目の授業の指導方法を示したものが表4である。

「基本練習を充分行っている」を行っている種目はハンドボールと硬式テニスであった。逆に「もっぱら試合中心」に行っている種目は卓球であった。指導方法が男

女ではっきり分かれており女子は「基本練習中心」、男子は「試合中心」の傾向があった。男女間でバレーボール、ソフトボール、サッカー、バドミントン、卓球に授業内容に関して有意な差が認められたが、とくにソフトボールとサッカーはそれが顕著に表れていた。

②ルールの理解度

表5は受講した授業でのゲームのルールの理解の程度を示している。

ほとんどの種目で理解していると回答しているが、バレーボールの理解度が高かった。逆にバスケットボールのルールに理解度が低かった。また女子に比べて男子の方が比較的理解している者が多いが、ソフトボール、サッカーや卓球に著しい差が見られた(p<0.05)。

内容	性別	n	理解の程度			p
			基本練習を十分に	基本練習は簡単に	もっぱら試合中心	
バレーボール	男子	46	37.0	19.6	43.5	*
	女子	82	54.9	24.7	20.0	
ソフトボール	男子	38	23.7	15.8	60.5	***
	女子	61	49.2	31.1	19.7	
サッカー	男子	45	20.0	17.8	62.2	**
	女子	60	46.7	25.0	28.3	
ハンドボール	男子	14	50.0	35.7	14.3	ns
	女子	29	69.0	17.2	13.8	
バドミントン	男子	29	27.6	13.8	58.6	ns
	女子	71	45.1	16.9	38.0	
バスケットボール	男子	45	22.2	13.3	64.4	***
	女子	78	47.4	21.8	30.8	
テニス(硬式)	男子	13	46.1	23.1	30.8	ns
	女子	52	58.5	20.8	20.8	
卓球	男子	27	17.9	7.1	75.0	*
	女子	69	31.6	17.1	45.7	

内容	性別	理解の程度				p
		よく理解できた	理解できた	あまり理解できなかった	殆ど理解出来なかった	
バレーボール	男子	48.9	46.8	2.1	2.1	ns
	女子	43.5	50.6	4.7	1.2	
ソフトボール	男子	60.5	34.2	2.6	2.6	*
	女子	32.8	55.7	9.8	1.6	
サッカー	男子	60.0	33.3	6.7	0.0	*
	女子	28.3	55.0	13.4	3.3	
ハンドボール	男子	50.0	42.9	7.1	0.0	ns
	女子	26.7	53.3	16.7	3.3	
バドミントン	男子	44.8	51.7	0.0	3.4	ns
	女子	34.7	52.8	11.1	1.4	
バスケットボール	男子	9.1	72.7	18.2	0.0	ns
	女子	21.1	51.3	26.3	1.3	
テニス(硬式)	男子	46.2	53.8	0.0	0.0	ns
	女子	29.6	55.6	13.0	1.9	
卓球	男子	64.3	28.6	0.0	0.0	*
	女子	38.0	45.1	14.1	2.8	

③教師による模範演技

表6は授業において担当教員が、模範を示したかを表した表である。3割以上の教員が「熱心に模範演技を示した」と回答している。これに対して、ハンドボールや

バスケットボールはクラブの部員を使って指導していた。

	熱心に 行った	簡単に 示した	クラブの生 徒を使った	行なわな かった	(%)
バレーボール	35.6	34.8	23.5	6.1	
ソフトボール	36.4	34.3	14.1	15.2	
サッカー	32.4	35.2	22.9	9.5	
ハンドボール	34.1	31.8	29.5	4.6	
バドミントン	36.8	40.0	14.7	8.5	
バスケットボール	32.5	30.8	30.8	5.9	
テニス(公式)	33.3	42.4	21.2	3.1	
卓球	33.7	30.6	15.3	20.4	

④技術の向上

その授業を受けて、自身のスキルがどの程度向上したかを聞いたのが表7である。

内容		すごく上 達した	上達した	変わらな かった	p
バレー ボール	男子	48.9	22.9	28.2	*
	女子	38.4	25.3	36.4	
ソフト ボール	男子	18.4	73.7	7.9	***
	女子	16.4	37.7	45.9	
サッカー	男子	18.2	56.8	25.0	*
	女子	13.3	36.7	50.0	
ハンド ボール	男子	7.1	64.3	28.6	ns
	女子	10.0	33.3	56.7	
バドミン トン	男子	31.7	65.5	3.4	**
	女子	19.4	47.2	33.3	
バスケット ボール	男子	17.8	77.8	4.4	***
	女子	12.7	44.3	43.0	
テニス (硬式)	男子	30.8	53.8	15.4	ns
	女子	11.1	59.3	29.6	
卓球	男子	21.4	71.4	7.1	*
	女子	15.5	50.7	33.8	

上達の程度は自己申告であるが、男子に比べ女子は「すごく上達した」、「上達した」と回答しものは少なく、ハンドボール、テニスを除く種目で男女間の上達の程度に有意な差が見られた。また男子はハンドボールを除く種目で上達したと答えているのに対して、女子はほとんどの種目で「変わらなかった」と回答するものが3割から5割見られた。ことに男子においてはソフトボール、バドミントン、バスケットボール、卓球については、上達した者が多く見られたが、ことにバレーボールは半数近く、バドミントン、テニスは3割の学生が「すごく上達した」と回答していた。

⑥表8は実際に教師になった時、現時点において授業で生徒に教える自信があるかどうかをたずねたものである。

全体的には、「まあある」、「どちらかといえば無い」という者が多かったが、総じて女子の方に自信のない者が多く見られた。バレーボールとソフトボールに男女間

で有意差が見られたが、バレーボールに関しては女子の方に自信がある者が多く見られた。ハンドボールに関しては自信のないものが多く見られた。

内容	性別	かなりある	まあある	どちらかとい えば無い	全く無い	p
バレー ボール	男子	8.7	52.2	34.8	4.3	*
	女子	30.0	25.0	30.0	15.0	
ソフト ボール	男子	2.6	50.0	31.6	15.8	*
	女子	0.0	35.7	50.0	14.3	
サッカー	男子	20.5	38.6	29.5	11.4	ns
	女子	15.0	18.3	36.7	30.0	
ハンド ボール	男子	0.0	31.1	24.1	44.8	ns
	女子	0.0	24.5	33.3	42.2	
バドミン トン	男子	6.9	34.5	51.7	6.9	ns
	女子	12.5	56.2	25.0	6.3	
バスケット ボール	男子	4.5	36.4	50.0	9.1	ns
	女子	10.5	47.4	36.8	5.3	
テニス (硬式)	男子	7.7	30.8	53.8	7.7	ns
	女子	0.0	36.4	54.5	9.1	
卓球	男子	7.1	32.1	39.3	21.4	ns
	女子	0.0	35.7	35.7	28.6	

⑦受講した時間数との関連

表9に「3年間の総授業回数」、「授業内容」が「ルールや基本技術の指導・説明」、「試合を行う時のルールの理解度」、「技術の向上度」、「将来指導する自信」がどのように関連しているかを各種目別に示したものである。

種目	項目	授業回数	授業内容	ルール技 術の説明	ルールの 理解度	授業 満足度	技術の 向上	指導の 自信
		多い	基礎中心	詳しく	理解	満足	上達	ある
バレー ボール	総授業回数	***	ns	ns	ns	ns	ns	ns
	授業内容	—	***	***	ns	ns	ns	ns
ソフト ボール	総授業回数	***	ns	ns	ns	ns	ns	ns
	授業内容	—	***	**	ns	▽***	ns	ns
サッカー	総授業回数	***	ns	ns	**	ns	ns	ns
	授業内容	—	***	***	ns	ns	ns	ns
ハンド ボール	総授業回数	***	ns	ns	ns	*	ns	ns
	授業内容	—	***	**	ns	ns	ns	ns
バドミン トン	総授業回数	***	ns	ns	ns	ns	ns	ns
	授業内容	—	***	***	ns	ns	ns	ns
バスケット ボール	総授業回数	***	ns	ns	*	***	ns	ns
	授業内容	—	***	***	ns	ns	ns	ns
テニス (硬式)	総授業回数	***	ns	ns	*	ns	ns	ns
	授業内容	—	***	*	ns	ns	ns	ns
卓球	総授業回数	***	ns	ns	*	ns	ns	ns
	授業内容	—	***	***	*	ns	ns	ns

どの種目においても、総授業回数の多さ、授業内容で基礎練習をたくさん行った者でも、それが技術の向上や将来指導する自信にはつながっていなかった。総授業回数の多さが、「試合上のルールの理解度」につながっている種目は、サッカー、バスケットボール、テニス、卓球などであった。またハンドボール、バスケットボールは「授業の満足度」につながっていた。基礎練習を多く行った授業が関連していたのは、すべての種目において、「ルールや技術の説明を詳しく学んだ」と回答していた。また卓球では「試合のルールが理解できた」者が多かった。しかしハンドボールにおいて、授業満足度は、「試

合中心」の授業の方が高い傾向にあった。

IV. 考 察

i) 高等学校体育実技授業における球技種目

高等学校の体育実技において、球技の種類は5種目ないし6種目経験した学生が多かった。種目別ではバレーボールやバスケットボールが多かった。全体的に体育館での種目が多く見られたが、各学校の規模や施設・設備の程度にも関連していると考えられる。すなわちグラウンドが狭い学校などでは、広い場所を占有するサッカーやソフトボールに代わり、上記の種目やバドミントンなど、室内型の種目を実施していると推測される。また女子にサッカーを授業で行った者が多かったが、最近のサッカー熱に加え、冬の持久走後の余った時間にサッカーを行っているケースも見られ、これらの要因が女子のサッカーの授業経験につながっていると推測される。

ii) 授業の内容

授業の方法については、男子の場合、ハンドボールやテニスを除いて試合中心の種目も多かった。小学校や中学校から行っていて、比較的なじみのあるソフトボール、サッカーやバスケットボールにおいては6割以上の者が試合中心と答えていた。しかしながら、中学校までの技術に加え、高等学校ではさらに高い技能を獲得するためのスキルが必要とされるので、その技術獲得のための指導や繰り返しの練習が必要であると考えられる。女子は基礎練習をしっかりとしているが、多くの球技に共通する、生徒間の技術の差が大きく、試合にならないケースも少なくない。

各種目のゲームの方法やルールに関する理解については、比較的なじみのないハンドボールについては、しっかりとルールを理解させる必要があると思われる。まあ女子においては、サッカーやソフトボールに関しても、同様のことが指摘される。またバスケットボールであまり理解できなかったと回答するものが男女とも少なくないが、バスケットボールは中学校からも行っていると思われるので、その原因を今後検討していく必要があると考えられる。

教師による模範演技は3割程度の教員が熱心に行っている。またクラブの生徒を使って指導している場合を含めると、半数近くが行っている。しかし逆に考えると、半数近くが簡単に示したり、行わないケースもある。授業の中でクラブに属する生徒がいない場合もあるので、少なくとも理論的に指導できるような体制をとることが

必要であると考えられる。

その授業を受講したことで、技術の上達があったと感じた種目は、男子の方に多く見られたが、「すごく上達した」と感じるバレーボールは、基礎練習を充分やっている種目で、この点から推測すると基礎練習の効果があつたと考えられる。また女子は技術が変わらなかったと答えた者が多かったが、クラブ活動などで多く経験を重ねた者と、元々の技術がない者の2極化が見られると推測される。したがって今後は、技術の低い者に対する、より効果的な教示法の

検討が示唆された。また彼らが将来的に指導者の立場になった時、指導する自信がないと答える種目が多く、とくにハンドボールなど、経験が少ない種目の指導が必要である。

授業の経験回数や教授内容は、基礎練習をしっかりと授業ではルールや技術の説明をしっかりと受けていたが、それが、ルールの理解度、技術の向上や将来の自信につながっていなかった。この点は今後の課題である。

iii) 現行学習指導要領 保健体育における球技の特性及び取扱いについて

現行の高等学校学習指導要領解説書（保健体育編・体育編）²⁾には球技の特性、技能特性、生徒からの視点、授業での留意点等が以下のように記されている。

1 球技の特性

「球技は、ゴール型、ネット型及びベースボール型などから構成され、個人やチームの能力に応じた作戦を立て、集団対集団、個人対個人で勝敗を競うことに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。」

従って球技は、器械運動、陸上競技、水泳、武道において、生徒個人が技能の習得や記録の向上を目指す種目とは違い、ボール操作等の個人技能を高めるとともに、チーム仲間との連携やポジショニング等も理解していかなければならない。

2 ゴール型（バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー）

(1) 技能特性

- ・「ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートやトライなどをして、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゲームである」(同上)
- ・ゲーム内において流動的にオフェンスとディフェン

スの場面があり、チームの作戦に応じた自分の役割を果たすことが求められる。

- ・直接的な身体接触があるので、傷害予防のための体づくりと相手をかかわす技能を身につける必要がある。

(2) 生徒からの視点

- ・特に、バスケットボールやサッカーは人気漫画の流行や身近に観戦する機会も増えて、馴染みのある種目なので、取り組みやすい。
- ・各種目ともボール操作するには、サッカーにおけるハンドやバスケットボールのトラベリング、ラグビーのスローフォワードなどの制限がある。
- ・ゲームの攻防においては激しい身体接触があるため、ルールやフェアプレイ精神の理解と安全に対する配慮が必要となる。特にラグビーにおいては、ヘッドギア装着の徹底を図るとともに、十分な準備運動や補強運動に取り組ませる必要がある。

(3) 授業での留意点

- ・安定したボール操作、状況に応じたボール操作ができるような練習メニューを準備する。
- ・チームとしての戦術やポジションニング等、生徒が主体的に思考・判断できるような工夫が必要である。特に、ボールを持たないときの動きについても、各自がその場に適切に対応できるように指導したい。

3 ネット型 (バレーボール, テニス, バドミントン, 卓球)

(1) 技能特性

- ・「コート上でネットを挟んで相対し、身体や用具を操作してボールを空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うゲームである」(同上)
- ・テニス、バドミントン、卓球については、シングルスとダブルスがあり、ラケット操作によってボールやシャトルに変化を与えやすく、様々なプレーを楽しむことができる。
- ・相手との身体接触はないが、サーブ・レシーブ・トス・スパイク・スマッシュ等一連の技能が必要となる。
- ・戦術面においては、ボールコントロールの強弱やカット等、各自が場に応じた技能を駆使する必要がある。

(2) 生徒からの視点

- ・テニス以外は体育館等の屋内施設において実施でき、少人数で比較的気軽に取り組める種目である。
- ・技能を高めることによってラリーを楽しめる。特にバレーボールは、ボールを落下させることなくつなぐ意識が高まり、チームとしての一体感を高めやすい種目である。
- ・これらの種目は、地域スポーツにおいて取り組める機会があり、生涯スポーツにつながっていくことが期待できる。

(3) 授業での留意点

- ・バレーボールについては、まずレシーブ・サーブ・スパイク等の基本的なボール操作技能を身につけさせ、レシーブ・トス・スパイクの三段攻撃とブロック等の戦術的技術獲得に発展させたい。チームとして戦術の工夫やつなぐ意識の醸成によって、連帯感が高まり、協調性を育成できる。
- ・テニス等については、基本的なラケット操作を身につけさせた後は、多くの相手とゲームをすることによって、さらに各自の工夫が生まれ、より高度な戦術的技術を獲得することが期待できる。

4 ベースボール型 (ソフトボール)

(1) 技能特性

- ・「身体やバットの操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位置での守備などによって攻守を規則的に交代し、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合うゲームである」(同上)
- ・まずバットやグラブ操作、ボール操作等の基本技能を確実に身につけなければならない。その後、打撃練習や守備練習等で状況に応じたバッティングや守備の連係を意識することで各技能をさらに高めることができる。
- ・ゲームにおいては、打順や守備位置によって各自の役割が変化してくる。そのような変化に対応できるよう思考・判断できる能力を身につけさせたい。

(2) 生徒からの視点

- ・最近の生徒は、かつて手軽にできたキャッチボールや草野球に触れておらず、バットやグラブ操作に慣れていない。また、ルールもあまり知らない。基本的なところから学習していく必要がある。
- ・ゲームにおいて、打撃や捕球等が思うようにでき、

得点の獲得や阻止に絡んだ時の喜びは大きいものがあり、感動や団結力につながっていく。

- ・ソフトボールであれば、あまり恐怖感を抱くこともなく、ゲームに入っていやすい。

(3) 授業での留意点

- ・用具や場所があれば簡単にゲームに入りやすい種目だが、基本的な技能や知識については状況に応じて指導していく必要がある。
- ・バット操作や捕球動作においては、周囲に気を配るなど危険性を認識させ、傷害防止につなげていきたい。
- ・審判の判定も勝敗に大きくかかわるため、公平な観点でできる教員や経験者等を上手く配置するよう配慮したい。

IV. おわりに

将来、保健体育の教員を目指す学生に対して、高校時代に受けた体育実技種目の中から、球技種目に着目して、実際に行われた球技の授業が、学生たちにどのように影響しているかを明らかにし、今後の大学におけるよりよい球技指導の授業の在り方を摸索するために行った結果、以下のことが明らかになった。

- ① 学生が高校時代に経験した実技種目は5～6種目で、男子より女子の方が多く経験していた。
- ② バレーボールやバスケットボールは経験者が多かったが、ハンドボールの経験は低かった。
- ③ 3年間の種目別の総授業回数はバレーボール、バスケットボール、バドミントンが多く、ハンドボールが少なかった。
- ④ 授業の方法は男子が試合中心、女子は基礎練習中心の種目が多かった。しかし、経験の少ないハンドボールやテニス男女とも基礎練習を充分行っていた。
- ⑤ ゲームの進行や、ルールについて理解できた者が多かったが、女子はできなかった者が少なくなかった。
- ⑥ 男子は技術の向上が見られた種目が多かったが、女子はソフトボール、サッカー、ハンドボール、バスケットボールに変わらなかったと答えた者が多くみられ、この種目の指導内容の再検討が示唆された。
- ⑦ 将来の指導に関しては「ある」と答えた学生は半数近くしかいないので、この点の指導方法も再検討する必要性が明らかになった。

- ⑧ 3年間の総授業回数や授業の内容は、種目によっては、ルールの理解度や満足度に影響していたが、すべての種目で技術の向上や将来の指導の自信につながっていなかった。

一口に球技と言っても、ゴール型、ネット型、ベースボール型と種類がある。さらにそれぞれのタイプの中でも、種目によって、技能特性、生徒からの視点、授業の留意点は異なっている。

したがって、球技の形態的特性、技術的特性、教育的特性をしっかりと把握しつつ、各球技種目が持っている、独自のゲームの方法や技術的内容における特性をふまえた指導が必要である。

今回明らかになった、学生たちの傾向を精査し、大学における指導法をより効果的に行うには、何がベストであるか、早急な検討が望まれる。

V. 参考文献

- 1) 杉山重利, 高橋建夫, 園山和男編:「保健体育科教育法」, 大修館書店, p16-19, 2014.
- 2) 「高等学校学習指導要領解説」, 保健体育編・体育編
- 3) 関四郎, 永嶋正俊, 羽鳥好夫, 朽堀申二編「球技指導ハンドブック」, 大修館書店, 1976.